

3. 大分県大山町「生産者の顔が見える農産物の販売」



地域の概況（大山町）

| | |
|----------|-----------|
| 総面積 | 4,572ha |
| 林野面積 | 3,621ha |
| 林野率 | 79.2% |
| 人工林率 | 78.5% |
| 耕地面積 | 281ha |
| 耕地面積率 | 6.1% |
| | 田(104ha) |
| | 畑(177ha) |
| 総人口 | 3,910 人 |
| 高齢人口 | 1,063 人 |
| 高齢化率 | 27.2% |
| 1次産業就業者数 | 636 人 |

図 2-3 . 大山町位置図

出典：2000 年国勢調査

2000 年世界農林センサス

1. 地域の概況

大山町は、大分県の西部に位置し、福岡県、熊本県の県境にあたり東西に 6 km、南北に 10 km の木の葉の形をした小さな町であり、1969 年町制を施行し大山町となった。交通は、大分自動車道の日田インターから約 30 分程度の距離にあり、観光地として多くの人々を集める由布院や黒川温泉へと至る国道 210 号線から分かれる 213 号線の途中に位置し、観光客の通過点としての位置にある。中央を筑後川の上流となる大山川が流れ、その周辺のわずかな平地や山間に 38 集落、3,910 人が生活する山村である。古くは、山から伐り出した木材を、筏を組んで筑後川を下り、福岡の町との交易で栄えた歴史がある。その習慣は、今でも受け継がれ、現在福岡市民との交流が盛んにおこなわれている。

なにより大山町を有名にしたのは、厳しい山間の地域にあって、1961 年に取り組まれた運動「NPC 運動」(ニュー・プラム・アンド・チェストナッツ運動) という新たな地域振興の取り組みである。「梅栗植えてハワイへ行こう」のキャッチフレーズの下、圃場や里山を開墾し梅や栗の木が植えられていった。その結果、梅の郷として九州有数の産地として栄え、一村一品運動のモデルとして全国に有名になった。現在では、梅が 80ha (2003 年度 227 t、7,700 万円) スモモが 34ha (160 t、8,000 万円) の作付けを誇る果樹栽培が盛

んな地域である。このような取り組みをきっかけとして耕地面積の少ない山間地域を有効に活用する農業の取り組みが積極的におこなわれており、大山町農協の資料によると 2003 年度の農産物の売上実績は合計約 22 億円で、最も大きい売上は、施設栽培の「えのき茸」の 7 億 2,000 万円、次いで「菌床椎茸」の 3 億 1,000 万円、「なめこ」の 2 億 8,000 万円、ハーブ、クレソンなどがそれに続き、知恵を生かした多品目少量生産の農業がおこなわれている。



写真 2-18 木の花ガーデンには、福岡ナンバーの車が多い

2. 取り組みの内容

大山川沿いにある「木の花ガーデン」は、大山町の取り組みの象徴である。町と農協が取り組む「有機無農薬農業」の販売拠点、また、都市の人々との交流拠点として位置づけられる。

表 2-2：木の花ガーデン・直販店売上推移一覧表

| | H13 | H14 | H15 |
|---------|---------|-----------|-----------|
| 売上高（千円） | 994,166 | 1,166,973 | 1,362,211 |
| 農産物販売高 | 25,675 | 31,626 | 37,118 |
| 雇用者数（人） | 54 | 59 | 60 |
| 集客数等 | 325,500 | 483,075 | 585,409 |

* 集客数等は観光動態調査の数値を記入（売上は、直販全店舗合計）

表 2-2 にあるように、集客数、売上高も順調に推移してきている。1990 年「木の花ガーデン」が開業し、1991 年度の売り上げが 1,230 万円、1996 年度の売り上げが 6 億 4,044 万円と比較すると大幅な売り上げ成果である。この順調な売上を支える背景に、新たに大山町の直営店以外への出店が進められ、2003 年度には 8 店舗を数えている。同時に、大山町の直営店では写真 2-19 にあるような、農家のもてなし料理をメインとするレストラン「オーガニック農園」が評判で、お昼時ともなると入りきれないほどの盛況である。同時に、直販所も町内の農産物だけではまかないきれないほどの人気を博している。



写真 2-19 農家レストランの惣菜コーナー

大山町における取り組みは、15 年ほど前に小さな農産物直販所を開設したことから始まっている。50 名の出荷農家から始まった取り組みが、現在では 2,000 名を超える農家が出荷にかかわり、大山町域内から日田市、中津江村などにも出荷農家が拡大するなど広域の取り組みとなっている。現在では、農産物や加工品の直売所「農産品バザール館」、「梅蔵物産館」、食事どころの「咲耶木花館」と「オーガニック農園」を設置した「木の花ガーデン」。福岡市に設置した交流拠点の「おおやま生活領事館」などのサテライト施設を合わせ、三次産業の拡大がみられる。この取り組みを支えているのは、農家とお客さまの信頼関係をつくるという基本、例えば出荷農家が各自商品に住所・名前・電話番号を明記し、同時に上代も自分でつけるというシステムである。すなわち、購入者との信頼関係を顔の見える表示を商品につけることによって作り上げ、同時に固定客の獲得をはかる仕組みが作られている。



写真 2-20 木の花ガルデン直販所

2 - 1 . 取り組み主体

「木の花ガルデン」の取り組みは、農協と農協組合員が主体となって事業を実施し、町が支援をおこなっている。写真 2-21 に見られるように山間の川筋に設置された「木の花ガルデン」の施設は、農協組合員の出資でほとんど作り上げられている。唯一、「梅蔵物産館」だけが町の施設として建設され、現在町が農協に貸与しているが、使用料は免除となっている。この施設は、町が主体となり農水省と国土庁の補助を受けつくられた。木の花ガルデンは、農協の下部組織「木の花ガルデン小組合」で支えられており、農協の直販事業として事業が実施されている。2003 年度、この組合員は 311 名をかかえており、「年間品物を切らせないで並べることができなくなってきたため、近隣市町村からも小組合に入っている農家がいる」(大山町農林振興課河津主幹)という状況である。

古くから、安全な農産物を生産することを地域の方針として掲げてきたこともあり、農協や普及センターが中心になって、有機栽培の営農指導を積極的におこなっている。同時に、地域内製材所から出るオガクズと牛糞に微生物を利用した有機堆肥を農協が生産し、販売もおこなっている。

直販所への出荷は、農協の組合員が基本となっているが、売上の 20%が農協に手数料として支払われ、そのうち 3%が大山町に収入として入る仕組みをとっている。



写真 2-21 山間の川筋にある木の花ガーデン

2 - 2 . 取り組みの経緯と概要

大山町の取り組みは、1961年に始まったNPC運動がすべてのスタートである。大山町の農家の平均耕作面積は50アール程度と狭く、その立地を活かすためには作物の収益性と土地の回転率をあげることを主眼に置いた「高次元農業」、単一作物に頼らない少量多品目生産、加工品の開発による高付加価値化、これらの実現による週休三日制の「知的集約農業」をこの当時から目指してきた。このとき使われたキャッチフレーズが「梅栗うえてハワイへ行こう」であった。このときの理念が今も息づいており、第一次産業に傾注しないで、第二次産業、第三次産業への複合化の取り組みが、この地域では当時からおこなわれている。

大山町はかつて林業の盛んな地域であった。日本三大美林に数えられる日田杉の産地として栄え、同時に筑後川を利用した筏によって材木を流し、川下の福岡市との結びつきが古くから強かった。経済・文化圏としては、大分県にありながら福岡県との結びつきの強い地域である。大山町の中心部を貫く、国道212号線は観光客の多い黒川温泉や阿蘇へ、同時に北を走る国道210号線は由布院へとつながり、多くの観光客が福岡方面からこの地域を通過し、それぞれの観光地へむかっていた。

1990年、このような観光客にむけて小さな農産物直販所を農協が設置した。当時、農産

物の直販所は全国的に見てもまだまれで、大きな注目をあびた。利用者の高い評価から徐々に規模を拡大し、1992年福岡市のスーパーにテナントとしてのコーナー設置、1995年には大分県のスーパーにコーナー設置がされるなど、サテライト的な直販所が拡大した。同時に、大山町の核施設も直販所に喫茶コーナーを加えるなど徐々に拡大し、現在では農家のもてなし料理を地産地消で取り組む「オーガニック農園」など、複合的な施設として運営がはかられている。この取り組みは、都市住民との交流を重要な位置づけとしており、1998年には福岡市内に交流拠点としての「おおやま生活領事館」が設置された。この施設は、大山町の農産物を使ったレストランを備えるなど、福岡市民との交流をはかることを主な目的に、過疎債を利用し県との共同で実施した事業である。



写真 2-22 農家レストラン

「木の花ガーデン」を訪れる観光客の60～70%が、福岡県からの顧客である。1998年に福岡市西区に設置された「おおやま生活領事館」の設置の成果や、古くからのつながりもあり都市との交流拠点として機能している。特に、農産物に生産者の名前を明記することや、安全な農産物を生産することを地域ぐるみで取り組んできたこともあって、直接農家に電話で注文が入るなど、農産物を通じた交流がすすんでいる。このような交流から、梅やスモモの収穫体験や、シソ梅干しづくり体験などの事業が実施されている。



写真 2-23 ひびきの郷

2 - 3 . 取り組みの効果と成功要因

2003 年度の年間売り上げ 13 億 6,000 万円という、直販所売上でも全国有数の成果をあげている「木の花ガーデン」からは、さまざまな波及効果が生まれている。大山町役場での聞き取りによると、地域での雇用創造（施設の 60～70%の職員が地元採用）、住民の意欲の向上。特に、農家の行政頼りの体質が改善され自発的に事業を実施する機運が向上している。連帯感が作りあげられた。年間 60 万人（2003 年度）もの観光客が訪れることによる波及効果が大。視察者の増加（2003 年度 2,724 名）による大山町の宣伝効果、などがあげられている。

このような事業を成功に導いた要因は、第一に 40 年以上前から取り組まれた N P C 運動。すなわち、中山間地の特性を活かした「知的集約農業」の実現を目指し、貧しい山間の暮らしをエネルギーに換え取り組んできたことである。第二に、都市部との交流が文化として古くからあり、交流を通じた新たな事業を組み立てることを目指したことが、大きな成果を生み出した。第三に、顔の見える安全な農産物の開発を、わかりやすい形で利用者に伝える仕組みをつくりあげたことである。第四に、大山町を広く訴求し、地域ぐるみのブランド化を目指したことである。大分から日本中に広がった「一村一品運動」の始まりの地などの知名度を上手く利用したことである。第五に、第一回全国梅干コンクールを開催するなど、加工品の開発等に努力目標をつくるなど工夫を凝らしたこと。このような大山

町の取り組みは、新たな波及効果を生み出している。その一つが、2002年に開業した町の第三セクター施設「豊後・大山ひびきの郷」である。これは「木の花ガルデン」の成功を受け、町が中心となって事業を計画し実施した直販所、温浴施設、レストランなどから構成される、都市と農村の交流拠点施設の整備事業である。町はこの拠点施設を活用し、第三セクター株式会社おおやま夢工房を設立し、事業運営をおこなっている。



写真 2-24 ひびきの郷の加工品

「ひびきの郷」総支配人緒方氏によると、この施設は「木の花ガルデン」の成功によって蓄積されたノウハウを基本に、新しい工夫を加え都市と農村の交流拠点として、大山町のまちづくり拠点として位置づけられている。同時に、この施設は「木の花ガルデン」との相乗効果を期待し建設された。開業3ヶ月で10万人の利用客を数え、2003年度の売上3億8,000万円、営業利益、1,300万円を計上するなど、順調なスタートを切っている。

特に、緒方支配人が取り組んでいるポイントは、POSシステムの積極活用やデザインやマーケティングにこだわること、マスコミの積極利用など、都市住民をターゲットとした企画を組み立て事業を実施している。POSシステムでは、固定客の買い上げ動向の把握など新しい利活用の仕組みを構築している。デザイン面では、施設のサインシステムを若手の有力デザイナーに依頼し、グッドデザイン賞を受賞するなど、商品から施設までの一貫したイメージ作りをおこなっている。マーケティングでは、大山町の安全で質の高い農産物という特徴を活かし、さらに最高の加工技術を組み合わせることによって、世界中のどの商品よりも優れた差別化商品を生み出す体制をつくらうとしている。実際、大手洋

酒メーカーと取り組んだ、梅酒づくり、果実リキュールは高い評価を受け、首都圏の高級食材店において首都圏価格ですでに販売されている。また、評判の良い梅酒を利用し顧客のニーズに対応し、180ccの飲みやすいサイズの商品を開発し、博多や東京の寿司店に販売を開始した。マスコミ対策としては、顧客をセグメントし、それに沿った媒体を積極的に利用している。「じゃらん」などの旅行雑誌、新聞やテレビなどのマスコミを上手く使い分け、同時に信頼されている人に話をさせるなど情報をコントロールしている。すなわち、「ひびきの郷」では経営感覚を持ったリーダーが、地域資源を有効に活用し新たな事業展開をはかっている。

特に、この施設で特筆すべきは、地域の施設として愛着を持ってもらうことを目的に、5,000万円の増資をおこない、地域住民302名が株主として出資をしている点である。すなわち、行政が施設を作っておしまいではなく、地域の人々がかかわる仕組みを、出資者となってかかわることから始めている。特に、豊かな生活の延長に観光があり、楽しく暮らすことによって外部の人々がやってくるという、緒方氏の信念から地元民が自分たちのものとして愛着を持って施設にかかわる仕組みをつくりあげた。同時に、交流という視点から、福岡への農産物の流通に使われるトラックに目をつけ、帰りの空のトラックに福岡中央図書館の書籍を積み、大山町の図書館で借り出せる仕組みをつくるなど、都市と農山村の間で、全く新しい交流・補間関係の仕組みの構築を模索している。



写真 2-25 グッドデザイン賞受賞・ひびきの郷サインシステム